
運動能力至上主義！

十歌龍太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運動能力至上主義！

【NZコード】

N1795M

【作者名】

十歌龍太

【あらすじ】

運動能力すべてが決まる社会。そんな世界にすむ運動大好き少女、動宮流美はある日、自分と同じ制服を着た青年が、圧倒的な力で交通事故で轢かれそうだった少女を救う現場を目撃する。そして、そこから彼女は今まで見ることのなかつた 社会の闇 を目撃することになる

出会い

絶好調だ。

何が絶好調なのかと問われれば、もちろん「今日のあたし」だと答える。
体ののびがいつもよりいい。
筋肉もいい感じに働いている。
痛いところもない。

今日は、いつもより高く早い「私」だろう。
いつもどつりの青い空、白い雲。風は少し汗で滲んだ肌を吹き抜けている。深とした、気持ちのいい静寂。だが、なぜかいつもより人通りが少ない。なにかあつたつけ。ああ、そうだった。

2126年 7月11日 今日は新憲法、「運動能力における優劣の決定」が制定された日だ。

運動法、と略されることもある。

運動法とは、今から26年前、「世界同時に全ての武器、および兵器を旧オーストラリアに置き、そこにあるだけの核爆弾を爆発させる」という平和を作るための、「人間最高の行い」とまで評された共同計画が行われた日の次の日に世界で制定された。運動能力ですべてが決まる憲法。

何のための憲法なのか、と問われるならば諸説あるようでは正確にはわかつていない。けれど、この計画で人類が捨てたものは兵器のみではなく、圧倒的過ぎた科学力、兵器の設計図などもだった。だから、科学に頼らず人間の力で努力していく「証」だった、という仮の正解がある。

まあ。

それが合っていても間違っていても、何の意味もないんだけど。
実際、その憲法によって人間の生活が豊かになつていったことは否定できない。

物量ではなく、
心の豊かさ。

曰く、真の豊かさ。

けれど、完全な平和なんてあり得ない。現に今のこの世界は「それ」ではない。

簡単な話、この憲法に反対する人間はいる。運動能力ですべてが決まる社会。聞こえはいいが、結局それは完全に順列化された、統率された綺麗な社会であるのだから。

よつて、必然的にはみ出し者も生まれる。全国区や準全国区クラスの人間を武器や銃で襲う事件は続いているし、その憲法にのつとつて、肉体のみで政府を転覆しようとしている集団もいるらしい。けれど、私はこの世界、この憲法に不満を持つているわけでは断じてない。

何故なら、この私。私はこのシステムが作られた世界の勝ち組となつてしまっているから。そんな私に関係のない事なんて、実にどうでもいいから。

全国区？ 1-1 動宮流美（じゅうみやりゅうび）である、この私にとっては

まあ別に、休日なわけではないからいいんだけど。何故だか暗黙の了解で、この日は休みのようになつていて。しかし、たしか今日は能力計測の日と重なつていてるから休んでしまつたら致命的なんだけど。さすがにあいつも来ているだろうけど……どうだろう。この世界において速く走る、高く飛ぶ、などの圧倒的に大事であるはずのそれらを「そんなことよりも」と言つてコミケの同人誌を買いに走る女だし。

改めて今日という日を考える。今日は待ちに待つた計測の日だ。

私のように順位に関係なく、運動が好きな人間からすればこれの楽しきは分かつてくれるだろう。

正直な話、私は運動以外に興味がない。ただただ、動くことが楽しくてしょうがない。まあその考えを他人に押し付ける気は毛頭ないんだけど。

気持ちいい朝。じうじう口にはいい記録が出る。私は正面から走つてくる風を受けとめながら、それが空気を切る音に耳をすませながら歩いていた。

しかし、瞬間。

ギュラアアア、といつすさまじい爆音とともに私の風の鑑賞会は終わりを告げる。

トラックだ。なんてことはない。いくら人間はある計画で科学を捨てたといえども、いろんな人間がこの世界にはいる。車を使うこと 자체は何て事はない日常（まあそれで全国区や準全国区を繰り返す事件はあるが）。

しかし、違和感があった。

今道の真ん中には5・6才だろうか、女の子が歩いているのだけど、トラックのほうはスピードを緩める気配がない。運転席がなんの動きも見せないからだ。まさかー

田をしつかと開けて運転席を見る。見えた、居眠り運転だ。こういう馬鹿はどんな時代にでもいる。いや、今のほうが平和ボケしていく起こりやすいのかもしない。少女は少女でトラックには気づかずにただひたすらに歩いている。このままではまずい。

私は瞬間的に、体を目覚めさせる。田を閉じ体に少し、力を入れる。全身に力が回っていく。

そしてゆつくりと田を開ける。その感覚にいつもなら酔いしれるのだけれど、そんな暇はない。私は右足に思いつきり力を込めた。ドンッ、という蹴りだし音によつて私は加速する。足を大きく前に出し、太ももを大きく躍動させる。

ストライドとピッチの黄金比。私は、走る走る走る。

少女を助けるために。こんな時のための運動能力だと自分に言い聞かせながら。

だが、直感は無情にも私に告げていた。無情なる運命を。己の限界を。

嘘、駄目？間に合わない

その瞬間。

気配がした。

突然、後ろからトラックが走ってきた。

私がこう錯覚するほど、青年は圧倒的すぎる走りで私のほうに走つてくる。いや、トラックに向かっている？

しかし青年の走りをトラック、と表現した私はすぐさまその間違いに気づく。

獣。あれは獣だ。

獣は全国区？ 11のこの私を突き飛ばして（人に突き飛ばされるのも随分とご無沙汰だった気がした）、トラックに突っ込んでいった。

おそらく、何の躊躇もなく。

衝撃、先ほどとは比べるまでもなく、爆音。真直でその衝撃を受けた私は、唐突に意識を失つてしまつていた

意識が、帰つてくる。意識よりも早く聴覚は僕の体に帰つていて、耳には何かの音が聞こえていた。そんな中、私の体が縦横に揺れる。何だろう。

「なあなあ、どないしたん。なんやじつい音がするもん、ヤジウマ精神で来てみたらまさか流美が眠つてゐるなんて。まったく、今日私は家から一歩も出ない覚悟でいたちゅうのに。めっちゃ写真撮つてもうたやんか。あ、もちろん流美のやけど。この惨状も気になるけど、まさか流美がやつた訳ないやんなあ」

牧子？あれ、私、どうして。状況整理のために周りを見渡そっとする。そして。惨劇が、目に入る。

大きくへこみ、抉れたトラックの正面。泣き疲れたようにしくしくとしている無傷の少女。がやがやと騒がしいヤジウマ。

そして思い出す。これらを引き起こしたにもかかわらず、今は見

えない自分と同じ制服を着た青年を

私はとりあえず牧子の手を借りて立ち上がる」とにする。牧子の手を握る。朝の冷たさによつて冷えた今の私にとつては気持ちのいい手だつた。

時刻を確認。八時二十五分。三十分に着けばいいからまだ少し時間がある。

この事故?が起こつた所から私の家まではちょうど半分の位置だからね。オッケー オッケー。

事故?の現場をもつと意識して見てみると、「彼」のすさまじさが伝わつてくる。トラックの頭の部分の公用な壊れ方とか。まあそれはいいとして。

背伸びをしながらこっちを見てくるうつとうしいヤジウマの視線から避けるために、車で死角になつている場所を選びペタンと座り込む。ジャリ、と砂でこする音がする。牧子はそんな私を見下ろす形で私の目を見ていた。

彼女は井川谷牧子。いかわだにまさこ一言で表すなら、オタクである。一言で表すならば、オタクで全国区である。

なぜか全国区といふ本来、圧倒的過ぎる称号が震んでしまう人。全国区?は最下位である50ではあるけど、本当の実力はわからない。

牧子は最下位といふ性質上準全国区?1の人間とよく戦っているけど、あまりにも実力差が圧倒的過ぎて試合が意味をなしていないのだ。対戦相手は汗だくになりながらもう殺す氣で殺す目で拳を振るうのだけど、彼女のほうは笑いながら全てよけてしまう。対戦相手は涙目だ。結局最後は疲れ果てた対戦相手にねぎらいの言葉をかけつつ急所に一撃で沈めてしまう。

たちが悪い。

いや。

本当に悪いのは性質ではなく性格だろうか。

どうちでも、相手からすれば同じだろうけど。

楽しい事至上主義だしね。あいつ。

もしも私が、牧子の言い方を借りるならば彼女の運動能力は「オールB」ということになるだろう。この表現は前に彼女も用いていた。

本来、といふか統計的に全国区の人間は何かの能力に飛びぬけているのがほとんどだ。その唯一の例外が彼女と全国区?1。あくまで噂だけど、全国区?1は運動能力が「オールA」であるらしい。私は牧子をとても高く評価している。彼女が眞面目になつたならば、私くらいには強いのではとも思つてゐる。

牧子はあまり努力をしない人だ。そして計測にもあまり行かない。全ては彼女の気分と予定しだい。

それでも結果は出して、全国区の地位をキープする。

そういう人。

趣味。古本屋めぐり&新作同人誌探し&新作名作旧作ゲーム探し。彼女は全国区で優遇されている金のほとんどをこれらに費やしていく。これらのために全国区になつたと行つてた氣もするし。

ちなみに、美人。とてつもないランクの。彼女が「かわいい!」を連呼するゲーム上の美少女よりも自分のほうがきれいなのだ。

本当に、たちが悪い。

「うち昨日からずっとゲームしてたんやけど、もうエンディングで泣いてもうてさあ。脱力したからちょっと学校には行けそうにないわ」

「また何言つてんの……まあいいか。あんたがそういうテンションじゃなかつたらどれだけ言つても来ないだろうし、来てもろくな記録が出そつにないし」

「いつも優しいね、流美。ありがと」「コッ♪

全人類がときめきそうな笑みを、私だけに向ける牧子。

ドクン、と心臓が波打つ。

心がざわざわとうねる。

……あぶないっ！

危うくときめくとこだつた。

まったく、私にそっちの気はないってのに。

「ちーて、せっかく外に出たことやし同人誌でも買こあさりに行きますかねー」

台無しだつた。まったく牧子らしい。

本当に優しい人間が、「私つて優しいでしょー」というのと同じ変な感覚。

私のときめきを返せ！

とまあ、ありきたりなセリフでもいいつつ。

「私も行くわ、じゃあね。また会えるならいつかまた」

恰好のいいセリフを吐いて 私はゆっくりと歩き出した。けれど、

気付く。違和感に。どこかおかしな不思議な感覚。

ん？あれ？こんなにゆっくりしてられるほど時間あつたつけ。

急がなきゃ

そう思いもう一度、時刻を確認する。

午後八時三十二分

面白いほどの、時計の壊れ方だった。

……かつこ悪っ！私。

来切繩架（くるきりくわ）来る。

「全く私としたことが、時計が十一時間三十分も遅れていたことに気づきもしなかったなんて」

いつつあ、1人事。まったくこうでもしてなきややつてられませんよ。余裕が三十分も出来ちゃつたし、どうしようかなあ。こんなとこで私がドジっ子属性に田覓めるなんて牧子に知られたら事だまあ、まずはこの世に存在する隙間をどう潰していくかを考えよう。無論、暇つぶしである。

ぴんぽんぱんぱーん、五分後。

……暇だ、暇すぎる。今日は計測日だからトレーニング道具は置いてきちゃつたし。牧子ともかつこよく別れたところだから今更戻るのもなんか癪だし。まず私の人間性から考えて運動以外で暇をつぶそうと考えたところからが間違っていたんだ。大人しく腕立て伏せでもしていればよかつた。けど測定があるから最低限の回数しかできない。運動熱中症の私に最低限の回数という日本語は辞書に載つていない。

結論。

どうしたものかなか。

……なんて頭の悪い結論なんだ。小学生か私は。それか人生に行き詰つたサラリーマンか。

「バカなことを考へてる顔をしてるけど、もしかしてバカなことを考へた？」

私の右方面に位置する壁が話しかけてきた。なんだ、妖怪塗り壁か。私は今とても重大なことを考へるので邪魔しないでほしいものだ。とりあえずスル スキル発動。

「…………」

「ちょっと、シカトはないでしょシカトは。あなたの好敵手の私が話しかけてるんだから返事くらいしたらどうなのよ」

「……塗り壁にライバル認定した覚えはない。重大な考え方の途中だから少しの間瓦を見習つて無言でかさばつてたらどう?」

「くつ……」いつ忘れていたというの?そして私に砕けろと言つてるの?」

「繩架。情報によると、この状態の動宮流美は頭の回転がおかしな方向に回っているみたいだよ。繩架の言うとおり。動宮流美は少し焦るところ、うつ風になってしまつみたいだね。おもに運動に直結しない方面での焦り限定みたいだけど」

「なるほどねえ、つてあなたはそんな詳しい情報どこで手に入れたのよ」

「全国区? 50」

「あのドウか、さらに納得の大きいなるほどね」

「これも? 50からの情報だけど、この状態の動宮流美と会話するには会話をちゃんと軌道修正する必要があるみたい」

「めんどくさつ、流美つてこんなめんどくさい人間だつたのね。……まあいいわ、これでは私の面目は丸つぶれな上に流美と会話する時に私はいちいち塗り壁認定されなければならないのは面倒この上ないしね。私が一肌脱ぎましよう」

「塗り壁認定を受けたのは繩架が格好いいと勘違いして壁の上から話しかけたからだといつのは、まあ私の勘違いだつたとして処理してもいいの?」

「当たり前でしょ」

来切繩架（くわきつるか）来る。（後書き）

投稿が遅れたのは、パソコン（のケーブル）が壊れたからの巻。久しぶりのパソコンは素晴らしい…とまあ関係ない話はさておき。小説が書けるというのは素晴らしい事だと感じた一週間。大切なことは失つてから気付く、というあれですね。

今回はギャグ、というか会話の面白さを重視して書いてみました。どうでしたか？

書きたい事がたくさんあるのでどんどん書いていきたいなー

「まあとにかくやつていいくしかないわね…。あー、『ホン。流美、まずは私のことを思い出してもらえるかしら。あなたの最高のライバルである私のこと』・全国区？？である来切縛架のことを。あんなに楽しそうに私を倒しておいてまさか、本当に忘れられるの？」

動宮流美は運動関連のことは忘れない。私はそれを身にしみて分かっている。彼女の戦闘能力の高さは運動能力だけではない、別の要因も多く存在する。あの《・・》決勝戦で私が負けたのは運動能力ではないのだから。そういうた彼女の性能の高さには私でさえ舌を巻いた。

まさに臨機応変のその強さに

彼女　動宮流美は私のほうにちらつと視線を向けると、はあ、と大きなため息をついた。私はそのため息の含む意味を理解しながらも、さも理解していないようにふるまつ。

「やはり覚えていましたか。まったく……」

あきれるように首を横に振る私。

「空氣読みなさいよね、あの状態の私には運動関係の話題は特効薬なんだから。ちょっとは牧子の助言に従う振りでもしてみたらどうなのよ」

「あのどこの言葉を鵜呑みにしていたらめんどくさくて厄介になるのは目に見えてるじゃないの」

そして、と私はつなげる。

「「得するのはあの女だけ」」

流美と意見がかぶる。？？に対する評価なら当然の事。あの女とかかわればそういう評価になってしまいます。

「よねえ」

「そういう人間ですからね、経験上」

まあこれで、結果オーライの一件落着となるのかな？

私は思いかけず出来てしまつた30分の時間を、私のライバルとともに過ごすということになつてゐた。まあ、今はほかにやることもないし、繩架も今日は運動法で休みなのでロードワークの最中だつたらしい（ちなみに繩架の学校は私と牧子の通う学校、神影学園のライバル校である空月高校の生徒である。どちらも運動能力向上を第一にする名門校として有名。学区は違うので運動能力計測の日時は異なる）。牧子を見習わせたいけどできるならとつぶくにできるだろうし、無駄だろうなあと考えていると、そろそろ時間に近づいていた。

「それじゃ、もう行くわ

「早くない？今から歩いても十分すぎる時間が残ると思われるよ

「いいのよ[磨理、調べたい事があるから」

彼女は補坂磨理。ほさかまり 県全区100位にして全国区7位の片割れ。二人で一人の全国区という特例である。

全国区や県全区などのランクには4つあり、頂上には全国区が君臨している。日本には現在一憶五千万人の人口にその20パーセントの学生がいるが、そのうちのトップ50が全国区となる。

全国区クラスになると権力と金が手に入る。電話一本でメイド1000人を一気にお買い上げできるほどにその権力は強い。しかし最も強いのはその実力である。

基本的に全国区クラスの人間に銃火器は通用しない。トラックなどの自動車による奇襲にも反応してよけることも可能があるので、襲われる事件が多発していてもけがをしたり何らかの傷を負うことはないに等しい。

次に準全国区。全員で1000人しかいない。全国区の権力を2段階落としたような権力を有する。

そして県全区。運動能力が一般よりも高い、といわれる人間は大

概このクラスとなる。

最後に、別職業区。運動理論という学問を修めたり、運動能力を上げる必要のないその他の職業に着きたい人間、そして運動能力を高めることを諦めてしまった人間が集まる。通称、堕落区。この世界における差別されし人々と言われることもある。

補坂磨理の様に、二つのランクを持つ人間は他にはいない。文字どうりの特例である。

「私も調べようか」

「ううん、いいや。とりあえず私だけで調べてみるから、それでも分からぬときは連絡するから」

「わかった、それじゃ」

「次会う時は模擬戦でいいから戦わないかしら？」

「会えたらね、それじゃあ」

どん、と地面を蹴つて走る出す。流美のいた場所には、空白が残されるだけだった。

流美は風のように走り、急いで学校に向かっていた。その理由はただ一つ、全国区である自分を突き飛ばした、あの『獣の青年』を見つけるためだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1795m/>

運動能力至上主義！

2010年10月11日07時42分発行